横浜市立大学論叢社会科学系列　2013：Vol.64　№ 3

普仏戦争 IX　―ロワール軍―

松　井　道　昭

第１章　パリはいつまでもつか？

トゥール派遣部の最大の懸念は、籠城のパリがいつまでもつかであった。ここの食糧が不十分であることは承知していた。しかし、戦後の議会査問委員会での陳述によれば、ガンベッタは正確にパリの持久力を知らなかった。パリを飛び発つとき、漠然と２ヵ月程度であろうと思っていたようであり、その後に入手した情報で３ヵ月程度と考えるにいたった[1]。彼がパリ救援を、無謀と思われるほどに急いだのはこうした理由による。

孤立した地方はあらゆる情報が間接的なかたちでしか届かないため、戦況はむろんのこと、パリの出来事も正確には伝わっていなかった。ただ全体として好ましくない状態にあるということだけはわかっていた。万事受身の態度がそこを支配していた。ケラトリは西南部と西部の動員をはかるため、ガンベッタにつづいて気球でパリを脱出した。彼は10月24日ボルドーで、籠城中のパリは地方の支援を待っているという演説をおこなった。しかし、パリほどの大きな町が包囲されるとは聴衆のだれも信じなかった[2]。

ガンベッタが頼りにしたのは軍隊である。オルレアン陥落に責任あるラ・モット＝ルージュ将軍に代わって、ドーレル・パラディーヌ将軍がロワール軍総司令官の地位に就いたことはすでに述べた。マルセイユで

1　ガンベッタは査問会の席上で、パリがもちこたえられるのは12月15～20日までと陳述している。*Enquête parlementaire sur les actes du governement de la Défense nationale, déposition des témoins,* tome 1, Versailles, Cerf et fils, 1872, p. 559.

2　Roth, François, *La guerre de 1870,* Fayard, 1990, 778 p., p. 242.

の騒動をたちまち平定した実績を買われての抜擢である。軍歴のほとんどをアルジェリアで過ごし、これまで１万以上の兵士を指揮したことはなかったし、老齢で生気に乏しいかもしれないが、そのぶんだけ熟慮と慎重さが備わっていた。

いちばん頼りとすべきロワール軍の司令官は任命できた。ガンベッタがひと安心する間もなく、東部の急を告げる報知が続々と入ってきた。ここを守っていたのは義勇軍だが、経験豊かな指揮官がいないため、ちぐはぐな戦いを強いられていた。そこで、国防政府は、スダンから逃げのびたカンブリエル将軍を司令官に指名した（９月18日）。彼は頭部に重傷を負ったまま指揮を執る。彼は苦労してなんとか４万の軍隊をつくりあげた[3]。彼の戦略は敵のソーヌ峡谷への侵入を防ぐことであった。俄仕立ての軍隊は何もかも不足していた。手にした武器はまちまちで、糧食補給も不完全であった。対するプロイセン軍は、装備が行き届き、かのストラスブールを落し、勢いに乗るヴェルダー将軍指揮下の軍勢である。ヴォージュ南端での競り合いで東部軍は消耗し、疫病の流行と戦場離脱のせいで半分の勢力に減ったのを見たカンブリエルは10月11日、ブザンソンへの撤退を決心した[4]。ヴェルダー軍の前進とともに、アルザス南部が放棄された。そうなると、フランシュ＝コンテが危うくなり、独軍にとってディジョンへの道が開かれたことになる。ガンベッタはフランシュ＝コンテの州都ブザンソンに急行する。彼は見たままを書いている。

「カンブリエルによるヴォージュ防御線の放棄は沈痛な思いで迎え入れられている。…［中略］…この退却はパニックとまではいかないにしても、ある特別の感情を生じせしめた。ある意

[3] Rousset, Léonce, lieutenant-colonel, *Histoire générale de la guerre franco-allemande(1870-1871).* 2 vols, Jules Tallandier, s.d.[éd. originale, 1895], 508, xvi p., p. 282.; Girard, A. et F. Dumas, *Histoire de la guerre de 1870-71*, Larousse, s. d., 143 p., p. 101.

[4] Girard, *Ibid.*, pp. 101-102.

味で、それは敗走に類似している」[5]、と。

ガンベッタはカンブリエルの要求を認め、必要な物資を補給することを約束した。ガンベッタの信認に応え、カンブリエルは全力を尽くし軍隊の再編に没頭した。こうしてできあがった軍隊は２万５千を数えた。それまで脱走に悩まされてきた将軍は新軍を正規軍、義勇兵、遊撃隊に区分し、それぞれの役割を明確にした。だが、将軍は頭部の負傷が治癒しないため辞意を申し出た。クルーザ将軍が後任の司令官となった[6]。

クルーザは以後、積極攻勢策を執るつもりでいたが、11月15日、トゥール派遣部のフレシネからの電報で、プロイセン軍の来襲を受けたロワール軍の救援のためロワール川に急行せよとの命令を受けた。そこで、クルーザは兵１万５千をリヨンに返し、自身は４万の軍勢とともにジアンをめざす。ヴォージュ軍の残りは義勇兵とガリバルディ隊のみとなった[7]。こうして、ヴォージュとフランシュ＝コンテががら空き状態になったため、独軍がソーヌ渓谷に進出し、そこから西進するのは容易だった。独軍の動静を知らない仏軍は、そうした危険が待ちかまえているとは思わない。

派遣部はヴォージュ軍残存部隊の司令官にだれを据えるか迷っていた。ガンベッタは悩み抜いた末にガリバルディを指名した。イタリアの英雄ガリバルディは国防政府を支援するため、２人の息子と部下を引き連れ義勇兵としてヴォージュ軍に身を投じていた[8]。この人選が適切であったかどうかの判断はじっさい難しい。ブルバキ指名の逆の反応を招く恐れがあり、ガンベッタが迷ったのはこの点である。ガンベッタはこの危惧を逆手にとった。つまり、彼には、世に有名な共和主義者を司令官に任命することにより、旧軍将校のブルバキを指名したのと釣り合い

5　Roth, *Op. cit.*, p.241.

6　Girard, *Op. cit.*, p.102.

7　Girard, *Ibid.*, pp. 101-102.

8　*Ibid.*, p.103.　ガリバルディは持病の痛風に悩まされており、行軍途中で馬から降りて休養をとらねばならないこともしばしばだった。

をとる意図があったかもしれない。つまり、国難を前に、フランス人のすべてがあらゆる信条と利害を乗り越え大同団結すべきであることを実例をもって示したかったであろう。

なるほど、ガリバルディはイタリア統一運動の英雄である。この外国人がフランスのために身を挺して戦おうとする勇気は人を感動させるに十分だった。だが、彼は、南イタリアの虐げられた小作農民の利害を代表する人物と見なされていた。まさに大国どうしの決戦の火蓋が切られようとするとき、こうした象徴的存在の外国人に仏軍司令官として指揮を任すことに無理はなかったのだろうか。象徴的存在というものは緊張の度合いの大きいときは、とかく為政者に思惑ちがいを起こさせるものである。果たして、ガリバルディの指名は、政治的意味合いこそ正反対だが、ブルバキが直面したのと同じ部類の反応を招いた。つまり、保守派のあいだにおいて、ガリバルディに協力することは共和主義革命に協力するのと同じという懸念を生じさせたのである。しかも、彼がイタリアから連れてきた赤シャツ隊は本質的にゲリラ戦を得意とし、訓練と演習を二の次にする傾向があった。さらに、大軍どうしの正面衝突を考慮に入れない作戦行動は職業的軍人から反発を招いた。こうした戦法が南イタリアでは有効であっても、それが独軍の大火力を前にして効果を発揮するとは考えにくい[9]。じっさい、司令官に就いてまもなくめぐってきた遭遇戦で、ガリバルディ軍は退却に次ぐ退却を余儀なくされるのである。こうしてヴェルダー軍２万はソーヌ川峡谷沿いに進出し、まもなくディジョンに達しようとする。ガリバルディ軍１万はブザンソンとディジョンのあいだのドールに布陣し、ここからディジョンの防衛戦に備えた。激戦の末、ディジョンは10月30日開城し、敗れたガリバルディ軍は南方のボーヌへ逃れた[10]。

ガリバルディ軍の名誉のために言っておくと、彼は得意とするゲリラ

9　*Ibid.*

10　*Ibid.*

戦法で敵の作戦を混乱に陥れるという効果は挙げた。特に弟リキオッティ率いる部隊が11月13日、シャティヨン＝シュル＝セーヌの町を急襲し、プロイセン軍に甚大な被害を与えたとの報に接し勇気を奮い起こした兄ガリバルディは幾たびもディジョン攻撃を仕かけ、ヴェルダー軍を悩ませた。それでもここを奪還できなかったのは、他の味方軍（クレメール将軍指揮）との連携がうまくいかなかったからである[11]。

ベルフォール要塞は１万５千の守備隊を擁していた。ここはまだ攻撃されていなかった。オ＝ラン県の知事ジュール・グロジャンは10月16日にここに避難してきていた。ガンベッタはダンフェール＝ロシュロー大佐を司令官に任命した。大佐はそれまでは要塞の工兵隊長でしかなかった。この抜擢は大成功だった。彼はこの要塞を最後まで守り抜き、ブザンソンの町はおろかフランシュ＝コンテ州全体を保護下においたからである。ベルフォール西方のラングル要塞も独軍の前に立ちはだかる戦略拠点である。この要塞も抜きがたいとみた独軍は標的をショーモン要塞に転換する。

ヴェルダー軍のソーヌ峡谷への進出は、ブルゴーニュとリヨネーが危険に晒されつつあることを意味した。リヨネーの中心都市リヨンはフランス第二の都会であり、古くは古代ローマの属国ガリアの中心であったし、百年戦争時にはブルゴーニュ派の根拠地として、長くパリに対抗したこともある。フランス革命時にはパリの向こうを張って連邦主義の拠点でもあった。とにかくリヨンは地域がら、フランスのなかでパリへの対抗意識のもっとも強いところである。パリが敵の包囲に堪えているのに、リヨンがみすみす敵の毒牙にかかってはたまらないとばかり、その市民が愛国心に燃え立ったのは当然である。彼らは要塞の防備、兵籍登録、武器調達にとりかかった。トゥーロンから大砲と砲手を呼び寄せた。10月末に臨戦態勢は整った。しかし、独軍の戦略目標はこの都市を陥落させることではなく、パリへの支援態勢を切り崩すことにおかれていた

[11] *Ibid.*, p.104.

ため、結局のところ、この町が攻撃されることはなかった。

話をオルレアン陥落後のロワール軍の動向に戻そう。ガンベッタは東部戦線を視察したのち、トゥールに戻り、ロワール軍の強化に全力を傾注した。ロワール軍はトゥールとブールジュのあいだに展開していた。ドイツ軍はオルレアンを陥れてロワール河畔まで達しながら右岸に止まり、ときおり斥候兵を派遣して敵情査察は怠らなかったが、渡河して南に進出しようとはしなかった。それは戦力不足だったからではなく、リヨンの攻撃を差し控えたのと同じく、最初からその必要を感じていなかったからである。ドイツ軍の主目標はあくまでパリ攻略であり、パリに向かう支援軍をロワール川で食い止めればそれで十分と考えていたのだ。

10月末、ロワール川以南の仏軍は10万を超える大軍に成長していた。ジアンからブロワまで約百キロメートルの横隊を描いた。第15軍団はアルジャンからラ・モット・ブーヴロンとサプリスまでひろがり、ブールジュを守っていた[12]。ブールジュに武器工場があり、その意味で重要だった。第16軍団はブロワの近辺に駐屯し、トゥールを守っていた。ドーレル司令官は訓練と食糧・武器・弾薬が整いしだい攻勢に出るつもりでいた。ロワール軍がしだいに大きくなり、数が揃ってみると、そこからひとつの幻想が生まれた。リヨンの『プログレ』紙は、同軍は完璧に組織され、潤沢な食糧と第一級の武器を備えていると激賞する。軍備に責任をもつグレ＝ビゾワン大臣にいたっては、自画自賛ともいうべき評価をした。

> 「１人のフランス兵は２人のプロイセン兵に、少なくとも３人のバイエルン兵に匹敵する。諸君は現在そうであるように、命令さえ正しく与えられれば、すぐに数多くの勝利をおさめ、パリにいる諸君の友人に手を差しのべるだろう」[13]、と。

最も慎重であるべき人物がこのような状態だから、他は推して知るべ

---

[12] Roth, *Op. cit.*, p.243.
[13] *Ibid.*

し。バイエルン軍もずいぶん舐められたものである。ここでは、弱いはずのバイエルン軍がオルレアンを陥落させたことが忘れられている。同軍はオルレアンを占拠するかたわら、分遣隊を尖兵としてソローニュに、偵察兵をブロワからボージャンシー・エ・メールまで送っていた[14]。仏軍志願兵と狙撃兵の部隊は、仏独の主力どうしが対峙している中間の地域に展開し、孤立した敵兵を急襲する構えでいた。そのうち選りすぐりの精鋭部隊は、カトリノーの率いるヴァンデ部隊だった。この部隊は、ボース地方の外縁に陣取るシャンジー軍の左翼を構成する[15]。

ガンベッタは焦っていた。ひとまず形の整った軍隊を一刻も早く実戦で試してみたかったし、結果はどうあれ、パリへの進撃を開始し、籠城中の同胞を励ましてみたかった。ガンベッタはオーレル将軍にしきりに進撃を催促する。しかし、ドーレルは、誕生してまもないこの軍隊の実力がどんなものかを知っていたため、この催促を時機尚早といって聞き入れなかった。人はとかく、門外のことは簡単に進むものと考えがちである。政治家と軍人はしばしば戦争の進め方をめぐって対立をする。プロイセンの首脳ビスマルクとモルトケにおいてそうであったが、フランス側でも同じような対立が生じたのだ。ガンベッタとドーレルの確執は今後、尾を引くことになろう。

第２章　クールミエ

独軍首脳部はずっと楽観論に染まったままで、モルトケはこう考えていた。主戦略目標はあくまでパリであり、これを締めつけてさえおけば、敵は一か八かの出撃戦を挑んでくるか、あるいは飢餓地獄に音をあげ白旗を掲げてくるかのどちらかであり、いずれにしても、勝利は動かないものとみていた。彼は戦法よりも時間のことを、すなわち、パリがいつまでもちこたえられるかを気にした。地方が挙兵してパリ支援に駆けつ

---

14 *Ibid.*

15 *Ibid.*, p.244.

けるようなことがあっても、それが戦争の帰趨を左右するほどの脅威になるとは考えない。トゥール新政府のガンベッタなる人物に何ができよう――近代戦というのは気概だけで遂行できるものではない、軍事にまったく疎い素人で、戦術戦法はもとより、兵士や将校の動かし方までも何ひとつ知らない青二才の若僧に何ができよう、と。どう足掻いても、もはやすべて手遅れだと見くびっていた。作戦計画に10年以上を費やし、準備に念には念を入れ、起こりうるあらゆる偶発事に対しても、逐一、対処法を練りあげていたモルトケの職業軍人としての自負がそこに見られる。

だが、立場こそ違え、モルトケとガンベッタに共通する認識があった。すなわち、パリが屈服すれば万事休すという認識がそのひとつであり、メッスのバゼーヌ軍20万がいつ攻撃に転じるのかという懸念（期待）がもうひとつである。モルトケはそれほどでもなかったが、孤立無援のパリを思いやるガンベッタのほうは居ても立ってもおれないほど焦っていた。ガンベッタはむろんメッスのバゼーヌ軍に期待をかけていた。しかし、バゼーヌはほとんど動かなかったし、その意図を知る術がなかった。メッスへはトゥールからまったく連絡が取れない以上、ロワール軍とバゼーヌ軍の連携作戦はそもそもできない相談だった。そこで、ガンベッタは考える。バゼーヌはバゼーヌなりに戦えばいい、ロワール軍が独自の動きをしたところで、それがバゼーヌの作戦行動に悪影響を与えることはあるまい、むしろ敵を牽制することになって、バゼーヌに決起のチャンスを与えることになるだろう、と。

ガンベッタがロワール軍に性急に挙兵を求めたのはこのような事情による。ドーレル将軍はさすがに軍人だけあって、出陣するからにはそれなりの備えを要すること、準備はそう易々と進むものではないと認識していた。将軍にしてみれば、ガンベッタがトゥールに到着してからまだ１ヵ月余しか経っていないというのに出撃をせよ、とはあまりにも無謀な要求だった。武器・弾薬の準備はおろか、兵の訓練もようやく緒につ

いた段階である。作戦行動でいちばんの懸念は将校の絶対的不足だった。ドーレルがガンベッタにそう告げると、ガンベッタは下士官と士官の両方について昇進を早める案をもちだした。それしか方法はなかっただろうが、これが実施されたため、まったく実戦経験のない者までが将校団の仲間入りをすることになった。辞令が下されたとき、現職の将校たちはあまりにも突飛な措置に自負心をいたく傷つけられた。

さらに、軍はひどい情報不足の状態におかれていた。敵の現在位置がわからないばかりか、パリのトロシュ将軍の意図もわからない。パリ救援のための進撃ということであれば、パリ軍との連携プレイが必須であったにもかかわらず、肝心の連絡がとれない。気球と鳩という通信手段は、機敏な状況判断とタイムリーな行動を要する作戦行動を支えるにはあまりにも頼りない。そこで、味方がパリの近くまで行けば、必ずトロシュはそれに応えて出撃するであろうという思い込みが頼りとなったのである。

ドーレルが政府の命令と軍人としての良心との間の板挟み状態で悩み抜いているころ、彼を仰天させる出来事が生じた。それはバゼーヌ軍が投降したという報道である。これはパリ市民の全体を落胆と憤怒の淵に追い込み、10月31日の暴動を招くことになったが、それはトゥール政府と抵抗軍をも震撼させた[16]。頼みとする大軍が消えた今となっても、まだなおこの脆弱な兵力を引き連れてパリに向かえというのだろうか。ガンベッタはうわ言のように、「徹底抗戦」を繰り返してやまないし[17]、フレシネもそうだった。「迅速かつ断固として行動せよ。貴官は準備に十分な時間をかけたではないか。今こそ出撃の好機である」（11月５日）、とけしかける[18]。目標はオルレアン奪還である。

---

[16] De Freycinet, Charles, *La guerre en province pendant le siège de Paris, 1870-1871*, Michel Lévy, 1871, 443 p., p.86.

[17] Lehautcourt, Pierre, *Guerre de 1870-1871, aperçu et commentaires, tome 2: Les armées de la Défense nationale,* Paris et Nancy, Berger-Levrault, 408 p., p.19.

[18] Rousset, *Op. cit.*, p.30.

将軍は出撃に応じなくてはならないはめになり、その期日は11月9日と定められた。ロワール軍の左翼はシャンジー将軍の第16軍団がつとめ、ブロワ近郊からピティヴィエをめざし北東へ進むことになった。オート＝ロワール県およびオート＝ピレネー県の狙撃兵とヴァンデ県の志願兵が偵察兵として付き添った。パリエール将軍の率いる第15軍団が右翼をつとめたが、同軍団はジアンでロワール川を渡河し、そこから北西方面に斜行し、オルレアンの森の縁に沿って進むことになった。作戦計画では左右両翼軍をそれぞれロワール川の川下からと川上からオルレアンに接近させ、そこに駐留するバイエルン軍を包み込む作戦だった[19]。総勢６万５千でもって２万２千の敵にあたるというのであって、力関係からみて仏軍に有利に展開するはずだった。それでも、この作戦に疑問をいだくドーレル将軍が途中で怯みはしないかが気遣われ、敵の兵力と位置について正確な情報を与えられなかった[20]。

フレシネに急かされるまま、ドーレルは11月９日、「午前５時起床、７時半にスープを啜り、８時には出発せよ」、と出撃命令を下した[21]。兵力からみて圧倒的に優勢なドーレル軍だが、軍隊両翼において顕著な兵力差があるという欠点をかかえていた。つまり、右翼が強いのに対し、左翼が弱体である[22]。川の流れを逆行するようなかたちで進むシャンジー軍（左翼）はまる一日霧靄のたちこめるなかを進み、翌10日、オルレアンの北西15キロメートル地点のパテー村とクールミエ村の近くでバイエルン軍およびプロイセン軍に遭遇した。仏軍のほうが数において勝り、砲撃も正確だった。アルジェリア歩兵も活力に満ちていた。バイエルン軍（タン将軍）はジリジリと押され、ピュイゾーとマレシェルブに後退。すかさずシャンジー軍は追撃に移るべきだったが、同軍にもはや

---

19 Lehautcourt, *Op. cit.*, pp.14-15.
20 Rousset, *Op. cit.*, p. 30.
21 *Ibid.*, p.31.
22 Lehautcourt, *Op. cit.*, p.19.

余力が残されていない。一方、パリエール軍団(右翼)は予定どおりロワール川をジアンで渡った。しかし、その後の進撃が緩慢すぎて、先鋒の分遣隊が左翼軍と合流したときにはすでに戦いは終わったあとだった。仏軍がオルレアンをめざしていることを予測したバイエルン軍は早々と撤退し、この拠点をあっさり明け渡す。パリエール軍の到着がもう少し早かったら、当初計画の挟撃作戦が図に当たった可能性も十分ある。

クールミエの戦いにおけるバイエルン軍の損失は軽微で[23]、その退却は戦術的なものだった。同軍はしっかりした足取りでアルトネーを経由してエタンプに到着。

だが、何にせよ、勝ちは勝ちである。ドーレル軍はオルレアンで歓迎の嵐に見舞われた。彼はまさに凱旋将軍そのものだった。兵士とともに市門を潜る諸将は勝利感で一杯だった。勝報を聞いたトゥールは歓喜の渦に包まれる。じっさい、「クールミエの勝利」は仏軍にとって普仏戦争における最初にして最後の勝利である。ところが、住民には、この栄光を第一歩として勝利が連続するように思われた。住民がそうであったとすれば、今度の勝利を導いたガンベッタとフレシネは誇らしい気持ちでいっぱいだった。なぜなら、彼らは、時期尚早という声を振り切って先制攻撃を敵に浴びせることを主張してやまない張本人だったからだ。ガンベッタは叫ぶ。

> 「一筋の希望の光が投げかけられた。…［中略］…諸君はパリへの道を進む。…［中略］…パリがわれわれ待ち受けていることをけっして忘れてはならない。略奪と放火の脅威をふりまく野蛮人の抱擁からパリを解放することは諸君の名誉にかかわることだ。」[24]

---

[23] 仏軍の死傷者は1500。タン将軍支配下のバイエルン軍が被った損失は死傷者800、捕虜2000にすぎなかった。Cf. Niox, général, *La guerre de 1870,; Simple récit,* 15e éd. Ch.Delagrave,[1896], 146 p., p.65.

[24] Rivière, Armand, *Le gouvernement de la Défense nationale à Tours,* E. Dentu, 1871, 183 p., pp. 145-146.

ドーレルは11月14日、ロワール軍総司令官に任命された。彼の権限はル・マンで編成中の第17軍団にも及ぶよう拡大された。同軍団の指揮はのちにソニ将軍に委任されるはずである。だが、ドーレルは自らの手で掴んだ勝利についてけっして幻想をいだいていなかった。パリへの出撃どころか、オルレアンの防衛すら覚束ないという。というのは、敵の敗北は虚を突かれた一時的なものであり、フリードリヒ・カール軍が到着すれば、オレルアンの維持は無理であることを知っていたからである[25]。しかし、これを別の立場からみれば、ようすは異なる。すなわち、メッスの抵抗がもう少しばかり長引いていれば、ロワール軍の増強はドイツ第２軍の妨害を受けることもなく、トゥール派遣部の期待どおりに展開し、パリ救援に駆けつけることも不可能ではなかったはずである。その意味でもメッスの不甲斐ない降伏は、果敢なる抵抗で流血の惨事を招いたスダン以上に、戦局を左右することになった。

パリではクールミエの勝利は11月14日に伝わった[26]。伝書鳩がツールから吉報を運び込んだのだ。

> 「ロワール軍は勝利をおさめつつある。オルレアンはわが軍によって奪還され、フォン・デア・タン将軍とプロイセン師団はトゥーリの向こうに撃退された。」[27]

待ちに待ったロワール軍がついに挙兵し、しかも初戦で輝かしい勝利をおさめたのだ。おそらくパリ市民のだれもが大革命時のヴァルミーの戦勝を思い出したことだろう。「ヴァルミー」こそ、フランスに侵入しパリ近くにまで肉薄してきたプロイセン軍を――運命の絆が繋がっているとでもいうべきか、この同じプロイセン軍を――革命軍が1792年９月20日、破った最初の勝利という記念塚だった。「ヴァルミー」以後、革

---

[25] Girard, *Op. cit.*, p.72.　メッス包囲軍はバゼーヌの投降後、マントイフェル率いる第1軍とフリードリヒ・カール率いる第2軍に分けられた。前者はパリ包囲軍の北側を支援するためコンピエーニュに向かい、後者はロワールをめざした。

[26] Dominique, Pierre, *Le siège de Paris,* Bernard Grasset, 1932, 316 p., p. 170.

[27] *Ibid.*, p.171.

命軍は連戦連勝し、ついに革命の安泰化をもたらすのである。「クールミエ」はまさに1870年の「ヴァルミー」であり、また、そうなるべきものであった。状況と舞台装置の何から何まで似ており、パリ市民が感涙に咽んだのは理由がないわけではなかった。「幸運の女神がわれわれに戻ってきた」[28]、とジュール・ファーヴルは叫ぶ。数日の間、曇天の晴れ間にパリ全体が勝利に沸き立つ。こうなったからには、パリに残された使命は一つしかない。つまり、パリからの総出撃だ、その時がついに来たのだ。

パリが包囲されて以来ずっと、デュクロ将軍の頭にあったのはそのことだった。彼は入念な計画を練っていた。計画は次のとおり。パリ軍は、パリの北側でセーヌ川蛇行が形づくる半島部分ジェンヌヴィリエに出撃する。ここまで来たら、同軍はセーヌの峡谷沿いに進んでルーアンをめざす。脱出戦につきものの敵の猛攻を凌ぐために、この作戦計画は、事前にロワール軍が鉄道を使ってノルマンディに到達していることを前提にしていた。それはいうまでもなく、ノルマンディを通ってパリに向けて進撃するロワール軍と、パリから西方に向け出撃するこのパリ軍とで敵を挟み撃ちにする計画である。前にも述べたように、パリの西側は敵の包囲網のもっとも薄い地域であったから、ここがパリ解放の糸口として狙われたのである。トゥールのガンベッタにその作戦計画を知らせたかったのだが、それは結局のところ果たされないままに終わる。デュクロは、連携プレイでないかぎりパリ軍が単独行動に出ることは危険と見なしていたのだが…。

デュクロの思惑や期待を知らないトゥールでは、次の行動をめぐりガンベッタとドーレルのあいだで暗闘が再開されていた。クールミエの勝利を高く買うガンベッタはこれを今後の勝利への突破口となるだろうという考え方に染まる。だから、とにかくロワール軍は余勢を駆ってパリ

[28] *Le journal du siège de Paris, publié par Le Gaulois,* Bureaux de l'Administration du Gaulois, 1871, 476 p., p. 228.

に向け進軍すれば、自ずと勝機は開けるとみた。いっぽう、軍人のドーレルは「クールミエ」は戦術上の勝利にすぎず、敵が援軍とともに万全の構えで報復戦を挑んできた場合、勝ちめはないと踏む。ドーレルは敵軍追撃や遮二無二の前進は軍を危険に曝すだけだとみた。彼はオルレアンの森でロワール軍を暫時休養させ、その間に訓練と増強をはかるべきだと主張した[29]。せっかくの勝利をものにしたにもかかわらず、文官と軍官のあいだでまたしても攻勢主義と待機主義の対立が表面化したのである。それに年齢・気質・信条に由来する違いが加わる。

攻勢論の立場を譲らないガンベッタが不安を感じていないわけではなかった。むしろその逆であり、不安であるがゆえに積極的攻勢論を唱えたのだった。その点でガンベッタはドーレルとさほど異なった立場にいたのではない。

とはいえ、ガンベッタの檄が功を奏しはじめ、かなり軍勢の骨格ができつつあった。ロワール以北に20万以上の兵士と250門の大砲が配備された。ロワール軍の構成は次のとおり、ソニ将軍の第17軍団が左翼を、ビヨー将軍の第18軍団とクルーザ将軍の第20軍団が右翼を成した[30]。

ドーレル将軍が動かないのをみてとったガンベッタはロワール軍右翼の2個軍団にピティヴィエを通ってフォンテーヌブローに向かうよう命令した。この命令に従い右翼は進軍を始めた[31]。

第３章　独軍の反撃

第１節　モルトケの自信

ヴェルサイユの独軍大本営モルトケの懸念は別のところにあった。敵将ブルバキのリールへの到着を知ったからだ。彼は今後、パリの北側が

---

[29] Niox, *Op. cit.*, p.65.

[30] *Ibid.*　ソニ将軍はアルジェリアから呼び戻され任についた。ビヨーはメッス包囲を脱出してロワール軍に仕官した人物。第20軍団は旧ヴォージュ軍の解散後に再編成された軍隊である。

[31] *Ibid.*, p. 66.

戦略的に重要になるとみていた。かくてモルトケは、メッス戦から解放されたマントイフェル麾下の第１軍を、パリ北郊に布陣する包囲軍に合流させた。モルトケはブルバキを高く評価していた。この男がリールに赴いたということは、パリ包囲軍に対して北側から脅威が迫ることを意味したのだ。

モルトケのロワール軍への配慮はどうか。実をいうと、10月末までのモルトケはロワール軍の存在すら疑っていた。話には時々のぼるが、俄か仕立ての軍隊など問題外と一笑に付していたのだ。ロワール軍の行動を知ったのは11月３日である。そのときはまだ重大事とは思っていなかった。それゆえ、クールミエで独軍が敗北を喫したと知らされたとき、彼の驚愕と悔悟は大きかった。奪還されたオルレアン、勝利に勢いづくロワール軍の動向がモルトケの注意を引かないはずがない。モルトケはただちに、シャルトル以南のすべての地域に駐屯する兵力を増強した[32]。

メッス包囲戦から自由になった軍隊（フリードリヒ＝カール王太子麾下の第２軍）は次に予定された戦場に行き着くため、11月２日から順次メッスを後にしつつあった。モルトケはこの一部を割いてロワール戦線の増援にまわすことにした。ロワール軍の先頭部分からパリまではおよそ100キロメートル。パリ南郊に布陣するドイツ包囲軍の位置からでは僅か70～80キロメートルにすぎない。よって、クールミエの敗北で新たに生じた脅威もけっして侮ってはならない。だが、ロワール戦線はあくまで戦略的防御に徹すべきものであって、無謀な攻勢策をとってはならない、とモルトケは釘を刺した。

メッスを離れ西方に向け移動を開始していたドイツ第２軍は11月10日、ヴェルサイユの大本営から一通の命令書を受けとった。「ロワール軍を圧迫せよ、可能ならば殲滅せよ」というものだった。メッスからオ

[32] De Moltke, Helmuth, comte. maréchal, *La guerre de 1870, Mémoires du maréchal H. De Moltke,* édition française par E. Jaégle, Paris, H. le Soudier, 1891, iii, 499 p., p. 228.

ルレアンまでは400キロメートルで、シャンパーニュを横切るのが最短距離になる。旅程はトゥール（ロレーヌ州 Toul）～ヌフシャトー～ジョワンヴィル～トロワ～サンスと決まった。しかし、ここを繋ぐ鉄道がないため、徒歩で移動しなければならない。10万の兵士、夥しい数の車両と馬の大行軍となった。シャンパーニュとボースはともに広大な平原であって地形上の障害はないが、それでも起伏がまったくないわけではない。大量の荷物をかかえての大軍の移動は時間がかかるはずだ。しかし、行軍は予定以上の速さで進んだ。途中、敵の抵抗にほとんど遭わなかったのだ。抵抗が皆無というわけでない。オーブ県とヨンヌ県の森の中で道に迷った兵士の一団と騎兵がときおり襲撃を受ける程度だった。11月19日、フリードリヒ＝カール軍がモンタルジに到着したとき、その町の駐屯国民衛兵の抵抗を受けたが、独軍からみれば、この守備隊は物の数に入らなかった。フリードリヒ＝カール軍の通過点を順に述べると、サンス11月13日、ヌムール同17日、ピュイゾー同19日、ピティヴィエ同20日である[33]。

モルトケは自信満々だった。その当時、彼と接触する機会をもった諸将は異口同音にそうした印象を口にした。プロイセン国王といっしょに会食することの多かったバーデン大公はモルトケについてそう語っている。大公も戦争について確固たる見通しをもっていた。クールミエで勝利した仏軍が勢いをかつてパリ包囲網の打破のために全力を挙げるであろう、と。当然のことながら北部軍、ロワール軍、パリ軍の連携が予想された。しかし、モルトケはこれも織りこみ済みだった。フリードリヒ＝カール軍が到着すれば、パリ南郊の包囲線が強化され、敵のパリ救援作戦を妨害することができるはずだ。火力と訓練に勝るドイツ軍が、いかに愛国心に燃えているといっても俄か仕立ての敵兵に屈するとはまったく考えていない。

11月末におけるモルトケの関心はもっぱら２つの事柄、すなわち、パ

[33] Roth, *Op. cit.*, p.282

リの食糧飢饉の悪化とロワール以北の敵軍の掃討に向けられていた。彼は、パリがまもなく飢餓地獄に陥って自ら開城するだろうと見ていた。モルトケはバーデン大公に「パリは今月末以降、もち堪えられないであろう」と述べた（11月21日）。だが、この予測は事実によって裏切られることになるだろう。ロワール以北の敵軍の掃討、モルトケの予想は首尾上々の展開をみるはずである。

第２節　北仏における仏軍の掃討

メッス開城後にドイツ第２軍（フリードリヒ＝カール）がロワールをめざしたのに対し、第１軍（マントイフェル）はパリ包囲に向かったが、そのとき、ルーアン、アミアン、北仏の各要塞を中心に始まりつつある再軍備と挙兵を叩けという命令を受けていた。

北仏に散在する要塞が独軍にとって厄介な存在だった。ダンケルク、サン＝トメール、エール、リール、ドゥエー、アラス、カンブレー、ヴァランシエンヌ、モーブージュ、アヴェーヌ、ランドルシーの第１要塞線(パリから見て)、ペロンヌ、アム、ラ・フェール、アミアンの第２要塞線はいずれも備蓄軍事物資を擁し、軍再編成の拠点となりうる可能性をもっていた。将校不足で悩まされたロワール軍と異なり、北部軍は、スダンからの逃亡やベルギー経由でフランスに舞い戻ってきた将校団に恵まれていた。食糧と大砲は存分にあったが、不足したのは騎兵である[34]。

早いほどよいという判断から、ドイツ第１軍はコンピエーニュまで進んだところで二手に分かれ、一方はアミアンに向かい、もう一方はノルマンディに向かった。

９月末以来、パリの北で少しばかり変化が生じた。パリ西方のマント近辺に駐留する独軍はノルマンディからくる遊動兵を阻止するため、セーヌ渓谷を監視していた。その他の守備隊はクレイユ、ソワソン、ボー

[34] Niox, *Op. cit.*, p.77.

ヴェにいた。これらの軍隊はマース軍の後ろを警護する。一方、騎兵隊は糧秣の徴発のためにヴェクサン、ソワソン、ボーヴェの各周辺地域を巡回していた。

戦闘が一時休止しているあいだに北部軍が編成されつつあった。前にみたように、ガンベッタはリール市へブルバキ将軍を派遣し、北部軍の総司令官に任命した（10月20日）。しかし、旧帝政軍の将校だったという彼の経歴が当初、新任地での活動の足を引っ張った。当地の共和派からくる悪罵にうんざりした彼はトゥール派遣部に解任を要請した。トゥール派遣部はこの申し出を承認しなかったが、度重なる要求に業を煮やし、11月18日ついに更迭を決定した。だが、こうした突発事は北部軍の編成にとってそれほど妨げとならなかった。この１ヵ月間にブルバキは要塞拠点を強化するとともに、１万７千余の軍を立ちあげていた。この他に遊動兵がいた。やがてブルバキ将軍の真摯な活動態度に心を打たれはじめ、共和派は徐々にこれまでの態度を和らげ、彼を信認するようになるが、すでに後の祭りだった。

国民衛兵の武装化と補給は俄か仕立てであり、少なからず混乱状態が生じた。厚紙製の靴底、裏地のない軍服、欠陥品の銃が支給される。寒々とした兵舎や遺棄された製糸工場に宿を当てがわれた新兵たちにはろくに衣服も武器も与えられなかった。王党派は非良心的な官僚たちや商人たちの腐敗と資金流用を激しく非難した。戦後に作成された国防政府査問録の中で共和派のテストゥランという担当官はこう述懐している。事を急ぐあまり、武器商人が即時提供してくれるという条件に飛びついて価格や品質への配慮が足りなかった、と[35]。兵士は海軍艇長ロバンの指揮下に入れられたが、ロバンがあまりに無能なために、やがてフェデルブが彼にとって代わる。だが、責任はこの官僚だけにあるのではなかった。敵がそこまで迫っている以上、事を一刻も急ぐ必要があったのはま

[35] *Enquête parlementaire sur le gouvernement de la Défense nationale; Déposition des Témoins, op. cit.*,tome 3, p.548.; Roth, *Op. cit,* p.285.

ちがいない事実である。

モルトケはブルバキがずっと北部軍の司令官をつとめているものとばかり思っていた。ブルバキの軍人としての手腕を警戒していたモルトケはマントイフェル将軍に６万の兵士をつけて、ブルバキのパリ進軍を阻止しようとした。

ブルバキがランスを発ったのは11月16日。その３日後に、猛砲撃を受けてサン＝カンタンが降伏する。北フランスの軍民当局は不意打ちを食らった。あまりの情報不足から狼狽するのみで対処の仕様がなかった。ブルバキとその参謀たちがすでに出立したあとでもあり、軍の指揮も麻痺に陥った。つづいてコンピエーニュ、ノワイヨン、ショーニーが陥落。11月13日以来、包囲されていたラ・フェールは同26日に降伏。攻撃を食い止めるため、ブルバキの後任が到着するまで（というのは、フェデルブ将軍はアルジェリアから帰還したばかりだった）指揮を執っていたファール将軍は北部軍の南進を決定する。

同軍は11月27日、マントイフェル軍と接触した。ヴィリエ＝ブルトヌーの激戦は６時間つづいた。数で勝る独軍（３万８千対２万５千）は仏軍をアルベールとドゥランスの方向に後退させた。双方に1,300ないし1,400の損失を招いた[36]。仏軍兵士の戦線離脱はひどかった。翌28日、ゴーベン将軍はアミアンに接近。300人の守備隊によって守られていた古い要塞は降伏した。物資、弾薬、食糧の保存状態が完璧のままに独軍の手に落ちた。しかし、マントイフェルはそれ以上の北進を中止し、ゴーベン軍のみをソンム川沿いに残した。マントイフェルは軍を南西方向のルーアンに進め、同市を12月５日に占領[37]。このため、パリ西方でフランス南部と北部を結ぶ鉄道線がドイツ軍に抑えられた。ルーアンは小高い丘に囲まれているため防御に適さず、仏軍２万は抵抗することな

[36] Niox, *Op. cit.*, p.78.
[37] *Ibid.*, p.79.

く、セーヌ左岸沿いにル・アーヴルまで退却した[38]。独軍も深追いを避け、監視するだけに終わった。そのため、ル・アーヴルは終戦まで仏軍支配下にあった。その後、北部戦線では司令官フェデルブ将軍の指揮下３万とドイツ第１軍とのあいだでソンム川沿いで散発的な戦闘がおこなわれたが、戦局を左右するほどのものにはならなかった[39]。

12月以降、パリ以北で独軍によって支配された地域はかなり広大である。北部軍は壊滅しなかったとはいえ、パリまで170キロメートルのところで阻止され、もはや独軍にとって脅威ではなくなる。かくて、パリ包囲の独軍は来るべきパリ攻撃に備え、占領地における鉄道線の復旧に専念することができた。

第３節　東部の戦い

ストラスブールの陥落（９月26日）後、ドイツ１個予備師団がアルザスの他の軍事拠点セレスタ、ヌフ＝ブリザック、ベルフォールの包囲に差し向けられた。ヴォージュ山塊は標高こそ高くはないが、森林が生い茂り、そこを縦横に道が走り抜けていたため、ゲリラ戦や防御戦にはもってこいの地形をなしている。しかし、仏軍側に山岳戦に長けた将軍がいなかったため、その地の利が活かされることはない。仏軍は義勇兵を中心にヴォージュ軍が編成され、指揮をカンブリエル将軍が執った。その実兵力は１万ほどだった。独軍はヴォージュ軍に編成の暇すら与えなかった[40]。

東部における戦況は10月中に急展開する。ブルゴンス（10月６日）、ランベルヴィリエ（同９日）、ブリュイエール（同11日）、エピナル（同12日）が落ち、ヴェルダー指揮下のドイツ第14軍団（バーデン軍）の前

---

[38] Merlier, Georges, éd., *La guerre de 1870-1871 en Haute Normandie,* Académie de Rouen, 1972, 233 p., pp.80-81. このときルーアンの明け渡しを決めたのは、２日前から北部軍の指揮をとっていたフェデルブ将軍である。

[39] Niox, *Op. cit.*, pp.79-81.

[40] *Ibid.*, pp.83-84.

にソーヌ渓谷が開けた。独軍はソーヌ川渓谷を南下し、リュール、ヴズール、グレを陥落させ、同月末にはディジョンに到達。しかしながら、ヴェルダー軍はさらなる南下を思いとどまった。なぜなら、このまま進めば、ラングルとベルフォールの要塞にたて籠もる守備隊が繰りだす攻撃に捕捉される危険性が出たからである。敗走を続けるヴォージュ軍はドゥー渓谷のブザンソンに布陣した。

ベルフォールおよびブザンソンにおける敵兵の駐留は独軍にとって脅威だった。モルトケはフォン・トレスコフ将軍に命じ、ベルフォールを包囲させた。トレスコフはすぐにベルフォールに急行する。ベルフォール要塞の総司令はダンフェール＝ロシュローである。彼は工兵大佐という肩書きだったが、ベルフォール籠城戦における果敢な奮闘をもって、フランス人が歴史上もっとも誇りとする名将の地位を不動のものとした。共和主義的愛国心に燃え、謹厳にして精力的なこの士官は城塞の内側に兵を退く戦術ではなく、防衛の原則としていくつかの戦略拠点の孤立防衛線作戦を採用した。むろん主拠点はベルヴュ――「絶景」の意、その名のとおり頂上からはすばらしい眺望が開ける――要塞であるが、周辺のオート・エ・バス＝ペルシュ要塞の守備兵を増強し村落を要塞化した。狙いは敵の分散化を図り、本拠点ベルヴュの包囲網をできるだけ無力化するところにあった。独軍がどんなに優秀な火力をもっていたとしても、遠巻きでは砲弾が要塞に到達しなかった。

10月末、トレスコフ将軍は２万５千の兵力でもってベルフォールを包囲した。11月３日、同将は鉄道線を抑えてブザンソンとの連絡を切断。11月６日にモンベリアールを制圧し、つづいて８日にはエリクールを抑えた。これはスイス国境を閉鎖するためであった。迎え撃つベルフォール籠城軍はおよそ１万７千。そのうち現役兵はわずか3,500にすぎず、残りはすべてオート＝ソーヌ、ソーヌ＝エ＝ロワール、オ＝ラン、ローヌ、オート＝ガロンヌの各県から掻き集められた遊動兵である。12月初めまでは小競り合いに終始し、目立った変化はなかった。籠城側は幾度

となく夜間出撃を繰り返し、包囲側の作戦行動を壊乱した。セレスタとヌフ＝ブリザックから廻された大砲[41]は11月18日に到着。しかし、砲撃開始までさらに半月ほど要した。ブザンソンにいる仏軍守備隊がローラン海軍士官のもとにベルフォール包囲軍の背後を脅かすべく神出鬼没の活動を展開し、ベルフォール籠城軍を支援したからである。

ベルフォールの西側では、ヴェルダー率いる独軍はラングル要塞の守備隊と、オータン付近に宿営するガリバルディ軍から挑戦を受けた。ラングル要塞はもともとベルフォールほどうるさい存在ではなかったため、独軍は正規の包囲戦術をとらず、遠巻きにして行動を監視するだけにとどめた。ラングル要塞は戦争初期において遊動兵の訓練と一時駐留の場所に指定されたところであり、防備は手薄であった。城塞の前進基地は防御が不完全であったため、農民の労力を借りて最低限の防備設備が施された。ベルフォールと同様に、守備隊は数こそ多かったが、そのほとんどが混成軍である。総司令官アルブローはダンフェール＝ロシュローほどの威信と毅然たる態度をもっていなかった。

フリードリヒ＝カール軍がラングルの包囲を始めると、ラングルは補給の困難をかかえた。独軍守備隊はショーモン、シャトーヴィラン、シャティヨン＝シュル＝セーヌに陣取った。11月13日から20日にかけてドイツ側の仕掛けた砲撃戦が始まった。ラングル籠城軍は反撃する。独軍は規定どおりの包囲網を敷く手段をもたなかったため、退却を開始し、焦らし戦術で甘んじた。

第４章　ガリバルディ

当時はまだヴォージュ軍と呼ばれていたガリバルディ軍はオータン付近に宿営していた。イタリアとスペインの義勇兵から成るガリバルディ軍の中核はガリバルディの２人の息子リキオッチとメノッチ、彼の女

[41] セレスタの開城は10月23日、ヌフ＝ブリザックは11月10日である。それに伴い、これらの要塞を包囲していた独軍がベルフォール包囲に廻されたということだ。

婿カンツィオ、友人ロビアが指揮を執っていた[42]。11月の末ごろ、ガリバルディ軍は総勢６千だった[43]が、翌年１月末には２万に増えている。トゥール派遣部政府はヴォージュ軍の増強につとめ、動員された遊動兵と志願兵を送りつづけた。９月から10月にかけて自発的に編成された大多数の「共和主義の」部隊は軍とは名ばかりで不統制の集団だった。正規兵はアルジェリアから召喚されたもので、これは戦闘が何であるかを多少は知っていた。他は志願兵であり、出身別に「アリエ部隊」、「アルザス部隊」、「ボージョレ孤児部隊」、「マルセイユ･ゲリラ部隊」、「ビゴール共和派部隊」、「パリ決死隊」等々と名乗っていた。このように枚挙していくと、さも強力な軍隊という印象を与えるが、実際は50人から200人の小隊ないし中隊規模にすぎない。武装は自弁でおこない、愛国的情熱こそ十分だったにせよ、訓練不十分で、闘争意欲が旺盛な反面、意気阻喪するのも早かった。

ギウセップ・ガリバルディは栄光につつまれた人物である。当年63才の彼はイタリアでの千人隊（1860年）の英雄であり、並ぶものなき闘士だったが、長年の闘争で疲れきっていたうえに、いかんせん病気だった。すなわち、持病のリューマチが悪化し、助けを借りず馬に乗るのもままならない状態だった[44]。ガリバルディの盛名はトゥール政府にとって重荷となる面があった。彼は名うての共和主義者にして反教権主義者であったため、この傾向がしばしばフランス人の純粋な愛国熱と摩擦を引き起こす。フランスは、というより地方のフランスはまだ敬虔なカトリックであった。地方人はフランスの防衛に熱心であったかもしれないが、ガリバルディの思想に同意したわけではない。ガリバルディ軍はしばしば教会堂で宿営し、ここで火を炊き、ときには家具類を燃やした。

---

[42] Niox, *Op. cit.*, p. 87.

[43] ガリバルディ軍の中核は、彼がイタリアから引き連れてきた義勇兵２～３千であった。「エジプト狙撃隊」、「東方ゲリラ隊」などを名乗っていた。

[44] Niox, *Ibid.*, p.87.

こうした不行状がガリバルディ軍にあったかどうかは確かめようがないが、彼が伝説的革命家で外国人であることがことさら反対派によって喧伝されたのであろう。さらに、彼の息子たちの軍指揮官としての腕は未知数だが、父親ほどでないことだけははっきりしていた。

ガリバルディはガンベッタおよびフレシネと密接な連絡がとれないため、行動上の自由をもった。彼の得意とする作戦は敵主力との正面衝突ではなく、弱点の急襲であった。かくて、彼が選んだ攻撃目標はシャティヨン＝シュル＝セーヌに駐留するプロイセン守備隊である。リキオッチを頭とする第４旅団は11月18日と19日の両日、ここを襲い、隊長と指揮官ら13人を殺害し、８人の将校を含む165人の捕虜を引き連れて凱旋した[45]。やがてプロイセン軍がこの町に戻り、報復として町を焼き討ちにした。11月26日、ガリバルディ軍は無謀にもディジョンめざし出撃するが、敗れてモルヴァンに退却した。つづいて12月１日にはオータン攻略に成功し、ここで停止した[46]。

もっと南のソーヌ渓谷ではカミーユ・クルメールの指揮下に軍団が編成されつつあった。その中核はローヌ川周辺地域と南仏から動員された遊動隊である。クルメールはロレーヌ州サルグミーヌ出身の弱冠30才の気鋭で、メッス攻防戦でクランシャン将軍の副官をつとめた経歴がある[47]。彼はメッス開城時に脱走してトゥールに来ていた。ガンベッタは彼を臨時の資格で師団長に任命し、敵のリヨンへの進出を食い止めるよう指示した。このクルメール軍とドイツ斥候隊およびヴェルダー師団とのあいだに11月18日と30日の二度にわたり激戦がおこなわれ、仏軍の辛勝に終わったが、各々1,700の損失をみた。ヴェルダー師団はこれ以上の南下を諦め、ディジョンに引き返した[48]。

---

[45] *Ibid.*, p.86.
[46] *Ibid.*
[47] Margueritte, Paul et Margueritte, Victor, *Histoire de la guerre de 1870-1871,* Paris, Hachette, 1914, vii, 293 p., p. 158.
[48] Niox, *Op. cit.,* p.87.

かくて、11月中の中東部戦線は概ね拮抗していた。両陣営の兵力はともに決定打を欠いていた。独軍が前進するためにはベルフォールを始末しなければならなかった。それがなんとしても落ちなかったのだ。他の要塞たとえばヴェルダン、ティオンヴィル、セレスタ、ヌフ＝ブリザック、ラ･フェール、ソワソンは砲撃されると早晩落城したが、ベルフォールは頑強にもち堪えたのだ。

第５章　ロワール軍の敗退

第１節　ボーヌ＝ラ＝ロランド

ロワール戦線が戦況打開の鍵を握っていた。ここで仏軍が勝てばパリへの道が開けるし、独軍が勝てばパリの孤立は決定的となる。11月15日以来、ガンベッタとフレシネは熱に浮かされたようにロワール軍の増強につとめる。ガンベッタは、時間の空費が不利を招くことを知っていた。フリードリヒ＝カール軍はパリをめざしており、そのパリは12月15日を超えては（食糧が尽き）抵抗できなくなるのだ。ロワール軍の崇高な使命はなによりもパリの救援であった。血気逸るガンベッタの前に立ち塞がったのがドーレル将軍である。彼ら文官・武官の領袖のあいだに公然たる喧嘩がもちあがる。11月初旬、ドーレルは「準備不足」を繰り返すのみであった。武器が足りない、装備も不十分、数だけ増えても何にもならない、と。

ドーレルの要求はロワール軍両翼の強化である。かくて右翼にブルバキが加えられた。北部軍を辞任したブルバキはトゥールに戻っていたが、ネヴェールとブールジュで編成されたロワール軍第18軍団の司令官に任命された。10月31日以来マコンに駐留し、ここで軍服・靴・野営具・背嚢・武器一式の支給を受けた。同軍団はエピナク＝レ＝ミヌで列車に乗り込み、11月18日にジアンに到着。

左翼は前述のようにソニ将軍が指揮した。11月15日以来ヴァンドームからシャトーダンにかけての地域をあてがわれた――主力はマルシュ

ノワールの森に布陣――ソニ将軍は第17軍団を再編せよとの命令を受けた。彼の日誌を読むと、彼が直面した困難のようすがありありと描かれている。彼は軍団の現在位置、編成の中身、そして、その実数すら知らなかった。地図もなければ、シャンジー軍団（第16軍団）とフィレック軍との連絡すらままならない。敵の位置も不確かで、情報も断片的で一貫性を欠いていた。

モルトケはボースとペルシュの縁あたりが敵勢力の薄い地域と予測する。仏軍遊動隊は一貫性を欠き弱体で、戦意なき住民は、独軍が進出しても無抵抗で神妙に占領されるがままになる状態だった。ここ一番！とみたモルトケは、シャルトルとエタンプ付近にいたメクレンブルク大公軍に、ル・マンに向け出撃するよう命令した。独軍主力の突然の出現を目にした仏軍遊動隊はノジャン＝ル＝ロトゥルーの手前で散り散りになり、列を乱した兵士らはル・マンに逃げ込む[49]。老将フィレックは態勢を立て直すことができなかった。かくて、ドゥルーとエヴルーが敵の支配下に入る。ル・マンも放棄寸前に追い込まれた。

11月22日、ル・マンを視察したガンベッタは幾人かの将軍を更迭し、ジョーレス提督を第21軍団の指揮官に据えた。ガンベッタは、北仏と南仏の結節点ル・マンを戦略上の要ととらえていた[50]。知将モルトケはル・マン攻撃と見せかけ、実はシャトーダン～ヴァンドーム軸線への圧力を考えていた。つまり、メクレンブルク大公軍への西進命令を撤回し、南進命令に切り換えたのだ。

11月22日から23日にかけての夜、オルレアンのパリエール将軍に、即時3万の軍勢を率いてシルール＝オ＝ボワに出撃し、24日にはピティヴィエに軍を進めよという命令が下された[51]。オルレアンから見て、ピティ

---

[49] Girard, *Op. cit.,* p.73.

[50] Rivière, Armand, *Le gouvernement de la Défense nationale à Tours, op. cit.*, p. 150 et 153.

[51] Section historique, du Grand Etat-Major prussien, *La guerre franco-allemande de 1870-71,* 13e livraison, pp.450-451.

ヴィエの延長線上にフォンテーヌブローの森がある。ここを抜けて北上すればパリはすぐだ。南方から援軍が駆けつけるのを知ったパリ総督トロシュは出撃戦を起こすだろう。かくて、パリ軍とロワール軍との独軍を挟み撃ちにする――トゥール派遣部の作戦はこういうものだった[52]。

ところで、総司令官ドーレルはどうかというと、塹壕にたて籠っての防御戦を考えていた。攻撃力をもたない自軍の脆弱さを理由にしての待機戦術がこれだ。彼は出撃どころか、オルレアンの放棄と拠点のロワール南方への移動を提案する。さすがのガンベッタとフレシネもドーレルの罷免を考えた。しかし、このたびの戦争で唯一の戦勝者を免職することは味方への悪影響もあってためらわれた。そこで、総司令官の免職を思い止どまり、彼の頭越しに第15軍団マルタン・デ・パリエール司令官にピティヴィエへの出撃を厳命したのだった。これはドーレルにとって事実上の権限剥奪に等しかった。ドーレルはしぶしぶ命令を追認した。彼が見越していたように、この出撃は結局のところ失敗に終わる。クレミューとグレ＝ビゾワン両大臣が命令伝達のために参謀本部へ訪れたことは作戦行動への口だしと見なされ、共和派の政治家たちに対するドーレルの恨みを倍加することになった。

11月末の数日のうちにロワール軍の戦略的布陣態勢はメクレンブルク大公軍とフリードリヒ＝カール軍による圧力増大のために崩れた。独軍は11月24日、ラドンとメジエールでオート・ロワール遊動隊とドゥーの志願兵部隊を掃討し、敗残兵をボーヌ＝ラ＝ロランド方向に押し返した（11月28日）[53]。

ボーヌ＝ラ＝ロランドにいた独軍は９千、対する仏軍は６万で、明らかに兵力差がある。ここでは独軍が防御戦術、仏軍が攻勢戦術をとることになる。当時の戦場図をひろげてみると、フランス第15軍団（マルタン・デ・パリエール将軍）がオルレアンの森の外れに位置し、後衛または予

---

52 Girard, *Op. cit.*, p.74.

53 Section historique, du Grand Etat-Major prussien, *Op.cit.*, pp.444-445.

備軍の役割を果たしている[54]。第20軍団（クルーザ将軍）が左翼、第18軍団（ビヨー将軍）が右翼で南方からボーヌ＝ラ＝ロランドを包囲する陣形をとる。対するドイツ第10軍団（フォイクツ＝レーツ将軍）が必死の防戦につとめたため、仏軍は陽のあるうちにこの堅塁を抜けなかった。夜が迫り寒気に襲われたクルーザ軍は撤退を決めた[55]。ほとんど包囲され、際どいところまで追い込まれた独軍だが、援軍の到着をひたすら信じ、堪えに堪え、辛くも窮地を脱することができた。かくてメクレンブルク大公国軍とフリードリヒ＝カール軍のあいだに連携がなり、総勢10万以上の大軍がロワール軍の前にたちはだかる。

ボーヌ＝ラ＝ロランド攻略作戦が頓挫した原因は、出撃命令が下ってからの緩慢な動きにあり、昼ごろになってようやく突撃態勢に入るありさまだった。それというのも、無為のうちに野営で十数日を空費し、兵士の体力消耗が激しかったからである[56]。

第２節　オルレアン再占領さる

11月30日、パリからトゥールへ一通の速達が届いた。それはノルウェーに着陸した気球ジュール・ファーヴル号によって６日前に運び出されたものである。この速達はパリ軍の出撃計画を伝えた。パリ総督トロシュはそのなかで言う。

> 「ロワール軍からの通知によりわが軍は南方への出撃をどんな艱難が待ち構えていようとも敢行することを決定した。日夜兼行での準備が完了するのは月曜日（28日）で、わが軍人のうちで最も精力的なデュクロ将軍率いる出撃部隊は29日に敵の防御線に突入する予定。もしそれを突破すれば、ロワール川をめざ

---

[54] Wawro, Geoffrey, *The Franco-Prussian War, The German Conquest of France in 1870-1871,* Cambridge University Press, 2003, xvi, 327 p., p.272.
[55] Margueritte, Paul et Victor, *Op. cit.*, p. 159.
[56] *Ibid.*, p. 160.

し、おそらくはジアン方向に進撃するであろう…。」[57]

ついにパリが動いたのだ。吉報にはちがいないが、この速達を受けとったトゥール政府が慌てたのはいうまでもない。パリ政府は敵兵と味方兵の配置を知らないまま南進計画を立て、しかも、はや、それを実行に移したのだ。

ともあれ、ロワール軍は動かなくてはならない。フレシネの解釈はこうだ。デュクロ将軍はマルヌ川を渡り、つづいてセーヌ川右岸沿いにムランまで南下し、ここでセーヌ川左岸に移って進み、フォンテーヌブローを通ってモンタルジに出るだろう。ここからジアンまではすぐだ。そうであれば、トゥール派遣部が11月23日以来、遂行してきた作戦計画を続行するのみ。すなわち、ロワール軍をボーヌ＝ラ＝ロランドとピティヴィエ経由でフォンテーヌブローに進撃させれば、おそらくフォンテーヌブローの森の中でパリ軍と合流できるだろう、と。

同日午後９時から11時までフレシネをまじえ参謀会議が開かれた[58]。列席者はドーレル、シャンジー、ボレル各将軍であり、第17軍団のデ・パリエールは欠席した。諸将は驚きと戸惑いを隠せなかった。準備がない。しかし、動かなくてはならない。結局、第15、第16、第18、第20の４個軍団６万５千が遠征軍となってパリ軍支援に向かうことになった。進撃態勢は第16軍団が左翼、第15軍団が中央、第18・第20軍団が右翼を構成し、最初の攻撃目標はピティヴィエ、次いでマレシェルブとヌムールとなった。行軍は８日間、３万人分の糧食補給を輜重隊がおこなうことになった。デ・パリエール軍団のみはオルレアン防衛のために残り、必要とあれば、ヴァンドームにいる第21軍団に支援を要請することになった[59]。

---

[57] De Freycinet, Charles, *La guerre en province pendant le siège de Paris, 1870-1871,* 3e éd., Michel Lévy, 1871, iv, 417 p., pp.133-134.
[58] *Ibid.*, pp. 134-135.
[59] *Ibid.*, pp. 137-138.

翌12月１日午前10時、サン＝ペラヴィとブーレのあいだに駐留していたシャンジー（第16）軍団を先頭に進撃が始まった。クールミエ以来３週ぶりの動きである。シャンジー軍団の抜けた穴を第17軍団が埋めた。

ちょうどそのころ、トゥール派遣部は11月30日パリ発の速達を受けとった。それはベル＝イル＝アン＝メールに降下した気球が運んだものである。29日朝に開始されたデュクロ将軍の出撃戦の勝利のもようを伝えた[60]。そして、その速達は翌12月１日にヴィノワ将軍により南進のための戦闘が再開されるだろうと結んでいた。

トゥール派遣部が有頂天になったのはいうまでもなく、すでに進撃を開始していた軍団の全指揮官にその旨伝達された。同時にトゥール派遣部はルーアンのブリアン将軍とリールのフェデルブ将軍に打電し、デュクロ将軍とロワール軍の共同作戦に呼応し、パリへの進撃を始めるよう要請[61]。

こうして12月初日はフランスにとって非常に幸先のよいスタートとなった。

最初の戦闘はオルレアン西北方において左翼第16軍団とフリードリヒ＝カール軍とのあいだに始まった。結果は曖昧なものに終わり、仏軍は少しばかり地歩を譲った[62]。翌12月２日、独軍は圧力を増し、ロワニーで激戦が始まった。戦闘は終日おこなわれた。仏軍は第16軍団が主力で、第17軍団と第15軍団の一部も支援のために出動し、総勢４万５千を数えた。対する独軍はメクレンブルク大公軍とドイツ第２軍３万５千[63]。仏軍の戦法はあまりに早い攻撃やあまりに遅い対応などチグハグだっ

---

60 *Ibid.*, pp.138-139. デュクロはそのなかで「死者としてか、勝者としてしかパリに帰還しない」と誓約した。結果として敗者として戻ってきたデュクロはのちに風刺画のなかで盛んに揶揄されることになる。

61 *Ibid.*, p.140.

62 *Ibid.*, p.142.

63 Niox, *Op. cit.*, pp.67-68. 戦闘は正午にロワニーで始まり、午後４時になると、その東方ブープリでフランス第15軍団とドイツ第22師団とのあいだで激闘が繰り返された。仏軍瓦解が始まったのは午後６時である。

た[64]。ジョレギベリー提督師団（第16軍団）の奮戦にもかかわらず、午後には幾つかの軍単位で瓦解が始まる。

ソニ将軍（第17軍団司令官）が戦場に到着したとき、自軍の逃亡の惨状を目の当たりにして唖然とする。「私は自分の目の前にいる兵士を撃って、持場に戻れと脅したがむだだった」、と将軍は語る。勇敢にも、シャレット率いるアルジェリア軍団[65]の先頭に立って夜まで抵抗した。しかし、損失は甚大であり、シャレットとソニは戦場で重傷を負った[66]。

12月３日はフリードリヒ＝カール軍はアルトネーを攻撃し、戦場はトゥーリとシャトーダンまで拡大する。仏軍は深夜まで抵抗したが、後退に後退を重ねた。４日になると、独軍はオルレアンの防御ラインまで迫る。砲撃は激しく、目撃者の話によると、独軍の砲撃のほうが仏軍の銃斉射よりも激しかったという。オルレアンが窮地に陥る。４日の深夜、敗走する仏軍はオルレアンを突き抜けてロワール川の南方に撤退を開始した。

12月４日から７日にかけての数日間、ドーレルとガンベッタの確執が爆発するとともに決着がつくにいたる。ドーレルは軍の全面崩壊を回避するため、オルレアンの放棄とロワール川左岸への退却をもち出した[67]。トゥール政府はむろんこれを拒否し、オルレアンの死守を厳命した。ドーレルは命令に服したが、それを実行したのが最悪の条件下においてだった。状況を厳密に検討した結果、ガンベッタはオルレアンの放棄を認めた[68]。

かくて、ロワール軍のパリ支援作戦は頓挫した。ガンベッタとフレシ

---

64 *Ibid.*, p.68.

65 ローマ教皇庁を警護していた駐留軍。

66 Van Neck, Léon, *1870-71 illustré,* Dorbon ainé, s. d.,[après 1904], 312 p., p. 256.: Girard, *Op. cit.* pp.75-76. 脚を撃ち抜かれたソニは戦場に倒れたまま夜を過ごし、翌朝、捕虜となった。脚は翌日切断された。

67 Rivière, *Op. cit.*, p.158.

68 *Ibid.*, p.159.

ネは敗北の責任をドーレルに転嫁する。12月７日、ガンベッタは彼の解任を決意した。ドーレルは威厳をもって軍職から離れた。後日書いた回想録のなかで、彼は敗戦の責任を「民間人の軍事行動への介入」のせいにした。彼はフレシネについて「軍を指揮し命令を下そうとした」と批判する。

オルレアン陥落後にロワール軍の全軍団がロワール川を渡ったのではない。右岸に残って激闘を継続していたのはシャンジー（第16）軍団とブルバキ（第18）軍団である。シャンジーは後退しながらもオルレアン東方のロワール河岸付近で、数で勝る独軍と格闘していた。戦いは独軍の追撃が終わる10日まで続くことになる。ロワール軍の分遣隊はドーレルとの連絡を失い、シャンジー将軍の指揮下にブロワとヴァンドームにいた。シャンジーは懸命に隊列と軍紀の維持につとめる。雪が降りはじめ、やがて雨氷となって辺り一面が泥沼となった。兵士らは湿気と冷気に苦しめられる。以下にトゥール出身の若き遊動隊員の記録がある。

「スープを作らず、ポケットに残った３、４切れのビスケット以外の食糧を携行しないで急いで出立したわれわれはボース平野を13時間も歩きつづけた。われわれから１キロメートルの丘地に敵の槍騎兵が現れた。解氷が始まった。われわれは滑りやすい柔土に嵌まりこんだ。…［中略］…凍りついたキャベツ畑に差しかかったとき、われわれはすべてが抜き取られ、生のまま齧り取られていくようすを目撃した。ヴァンドームから１リューのところで夜を迎えた。一行はそうとは知らず、泥地のようなところで眠りについた。…［中略］…わが哀れな遊動隊は絶望の淵に追いやられた。彼らはもはや戦意を失い、完全に気落ちしたまま槍騎兵を待ち受けた。」

損害と脱走は限りなかった。しかし、メクレンブルク大公軍の追撃は緩慢だった。ボージャンシーとヴァンドームでの防御戦が巧みにおこなわれ、シャンジーは自軍主力を温存しつつル・マン方向に離脱した。

一方、ロワール軍の右翼ブルバキ軍団は何をしていたか。同軍団はなお軍備の整わない状態にあった。オルレアンの森に守られ、ジアンへの連絡を維持していた。同軍団は敵を待ち伏せし、しかるべき命令を待っていた。12月５日以後、独軍は圧力を増し、孤立した同軍団を攻撃する一方で、その分遣隊はすでにジアンまで達した。

12月７日、ブルバキはオルレアンの森を放棄し、ロワール川以南への撤退を命じた。その日は非常に寒かった。12月７日から８日にかけての夜、気温は零下18度を記録。やがて大潰走となった。

「兵士たちはめいめい、あるいは小グループごとにジアンの橋の袂に到達した。彼らはできるだけ縦列をつくって進む。武装している者もいれば服装の乱れた者もいる。砲兵隊の工兵庫と野戦車が群衆を掻き分けて進む。」

つづいて、工兵隊が物資と弾薬を運んだ。ジアン、シャティヨン、コーヌ、サン＝ティボーの町にかかる橋という橋の全てが12月８日朝に爆破された。プロイセン軍、つづいてはバイエルン軍がジアン、ブリアールからシャティヨンまでのロワール北岸を占拠した。独軍の工兵がジアン橋の修復を企てたが、ロワール川左岸付近に残る仏軍狙撃兵の一隊によって攻撃された。ブルバキ軍団はオービニー、そしてブールジュまで後退する。トゥールと同じくブールジュでもパニックが生じる。それもむべなるかな、古代ローマのカエサル以来、この古い町は敵襲を受けたことがなかったのである。12月３日と４日の戦いでロワール軍の損失は２万、うち１万８千が捕虜であり、その大多数が第15軍団であった。独軍が捕獲した大砲は74門、砲艦４隻、被った損傷は約1700人であった[69]。

ロワール軍は３グループに分かれた。中央の、最大損失を出した第15軍団はヴィエルゾンまで撤退する。右翼の第18軍団と第20軍団はブールジュに撤退。左翼の第16、第17軍団の計10万はロワール川右岸のボージャ

[69] Grand Etat-Major prussian, *La guerre franco-allemande de 1870-1871, op. cit.,* p.521.

ンシーまで退却した[70]。

独軍勝利の結果はオルレアンの再占領とロワール右岸の完全な制圧である。フリードリヒ＝カールは12月５日、オルレアンに入城し、県庁に本拠地を設けた。多くの逃亡兵と負傷者が取り残されていた。

「オルレアン駅は負傷者で一杯だった。…［中略］…兵士はすべてボロ切れ同然の衣類をまとっていた。ほとんどの者が頭巾付き外套も毛布ももっていない。石も割れんばかりの厳寒とはまさにこのことを言う。」

デュパンルー猊下は傷病兵を救うために司教館と宗教施設の門を開いた。12月６日、ここに到着したクレッツマン大尉は妻宛ての書簡で当時のようすを述べる。

「冬の晴天。厳寒にして陽光あるが無風状態。デュパンルーの舘の近くに大聖堂がある。ゴチック式とルネサンス式の折衷、とその様式はどうということはないが、その大きさに驚かされる。その内部はどうか？　あなたに何を言ったらいいだろうか。ハルベルルシュタットの大聖堂の２倍はあるその空間を思い浮かべてほしい。そこに９千人のフランスの捕虜が閉じ込められていたのだ。半分凍えた、哀れな者たちに私はもの凄い印象を覚えた。」[71]

次いで、彼は街を探索し、半分皮肉を込めてジャンヌ・ダルク像を目撃し、流氷を押し流すロワール川を嘆賞し、街路で仲間と落ちあう。今後の戦闘は彼に楽観を植えつけた。

「ロワール軍は事実上潰滅した。フランス正規軍の残存舞台がわが軍に向けられたが、むだだった。敵兵はことごとく蹴散らされた。勇者は殺害され、臆病者は捕虜となり、卑怯者は逃亡

[70] Niox, *Op. cit.*, p.70.
[71] Roth, *Op. cit.*, p.295.

した。」[72]

ロワールの戦いの結果は明白である。８月以来何も変わっていなかった。独軍の数の優越、砲兵隊の優位、統制と指揮において優れていた。ガンベッタと彼の協力者たちの努力は根本的な不均衡を是正できなかったのである。遊動隊は職業的軍隊の火力の前に粉砕された。独軍将校は具体的に状況を把握した。

「このような軍隊を砲火の前に送るとは嘆かわしくもあり、無責任でもある。彼らは兵士であることがなんであるか、まるでわかっていない。…［中略］…砲兵隊は空に向かって撃つが、ほとんど手応えはない。騎兵隊は不足。武装ははなはだ劣悪。フランス人が評判高い勇猛心をもっているにもかかわらず、この軍はほとんど抵抗力をもたない。」[73]

パリの解放は今や手の届かないものとなったが、すべてが終わったわけではない。ロワール軍は四散したが、潰滅はしなかった。ほとんど交戦することのなかったブルバキ軍団はブールジュとネヴェールに再集結する。シャンジー将軍はヴァンドームとル・マンのあいだの失地回復をもくろむ。ガンベッタはこれを支援すべく第二次ロワール軍を編成し、シャンジーを司令官に任命。中核をなしたのは元の第16・第17・第21軍団の計12万である。この第二次ロワール軍はジアンからブロワのあいだのロワール北岸に送られた。ときどき川の南側のヴィエルゾンとシャンボールのあいだに出没する。もう一つの軍がフランスに残った。元の第15・第18・第20軍団から成る10万は東部軍としてブルバキ将軍に委ねられた[74]。

モルトケは敵の潰滅という目的をまだ達成していなかった。敵を西部と南部に追撃し、糧秣倉庫の線を延長し、ドイツから援軍と糧食の追加

---

[72] *Ibid.*

[73] *Ibid.*, p. 296.

[74] Niox. *Op. cit.*, p.70.

補給をしなければならなかった。モルトケはすかさず以下の指示を出した。「休息せよ、補充せよ、補給せよ。何はともあれ、大兵力を擁しながら剣で水を突くようなことはやめよ。」メクレンブルク大公軍はドゥルーからヴァンドームの西側つまりボースとペルシュの外周地域を監視した。独軍にとってネヴェールからブールジュの方向とル・マン方向の両面を警戒する必要があった。前者でブルバキ軍がふたたび攻勢に出る可能性があったし、後者ではシャンジー軍が戻ってくる可能性があったからだ。

独軍が前進するうちにトゥールが無防備であることが明らかになった。敵の脅威を受けはじめたこの町に居つづけることが不安視された。派遣部はボルドーに移ることになった。12月９日の夜、臨時列車が閣僚と官僚たちをボルドーに運んだ[75]。この日、トゥールを留守にしていたガンベッタは11日に戻り、同僚たちと合流する。雰囲気は陰鬱だった。大臣たちと多数の負傷者および避難民の急な移動、ウソと虚報は軍隊が真実の惨劇を被っているとの印象を与えた。数時間のあいだ、民間人はパニックに陥った。静穏な日々は終わりを告げ、ホテルは空っぽとなる。人々は今か今かとプロイセン軍の到着を待った。いろいろな事情でプロイセン軍はここを占領しなかったが、同じような光景はブールジュでもシャトールーでも繰りひろげられた。

[75] Rivière, *Op. cit.*, p.169.